

博報堂生活総研の キラードータで語る リアル平成史

家田 莊子
石山 蓮華
大木 亜希子
小川 さやか
熊代 亨
倉田 真由美
近藤 那央

斎藤 哲也
サヘル・ローズ
高橋 弘樹
棚橋 弘至
田村 淳
為末 大
常見 陽平

鳥羽 周作
豊田 啓介
中川 淳一郎
西田 宗千佳
藤田 結子

博報堂生活総合研究所・編

19人の豪華識者 が
巨大データで語る
「平成のリアル」!

※この本は、博報堂生活総研が生活のあらゆる意識と行動を
約1400項目にわたって28年間集計し続けた、世界に類のない
大規模公開データベース「生活定点」に基づいています。

博報堂生活総研のキラードータで語るリアル平成史

博報堂生活総合研究所 編

星海社

207



SEIKAISHA
SHINSHO

はじめに データは「答え」か？ 「問い」か？

本書のタイトルにある「博報堂生活総合研究所（※1）」は、今年で設立40周年を迎えた生活者研究専門のシンクタンクで、「キラーデータ」とはその研究の土台として1992年から2年に一度実施している「生活定点（※2）」というオリジナル調査を指しています。

この「生活定点」は同じ時期・同じ地域・同じ属性の人に、生活のあらゆる意識と行動を約1400項目にわたって28年間、飽きもせず聞き続けているという世界でも類をみない大規模調査です。それゆえ、このデータベースは、「生活者発想」を企業哲学に掲げる博報堂ならではの武器として、広告の現場で活用してきました。

そんななか、我々は2012年にwebサイトを通して、この「生活定点」の全調査結果の一般公開を始めました。多額の費用を投じて蓄積してきたデータを、なぜ無償で提供しているのか……？ そんな質問を今でもいただくことがあります。そのきっかけは前年

に起きた東日本大震災でした。日本が悲しみと不安で覆い尽くされるなか、当時は企業も個人も自分にできることは何かを考え、行動に移しました。博報堂生活総合研究所も同様です。そして、調査研究を生業なりわいにしている我々にできることは、得られたデータを社会資産として広く公開することではないかと考えました。それはなぜか？ 実は調査結果をみていると、時に自分の感覚値や予想と大きく異なることがあります。もともと、その時に感じる驚きや疑問は、自分とは違う価値観を持った存在に気づくことにもつながりますし、そのことこそ多様性を認め合える共生社会の実現に役立つのではと考えたのです。その後、公開して10年近くになりますが、お陰様で今でもたくさん企業の・団体や研究者の皆さんにご活用いただいています。

さて、2020年から感染が拡大した新型コロナウイルスは、私たちの日常を大きく変えてしまいました。そして今もなお、暮らしやビジネスは目まぐるしく変化しています。では実際のところ、何が変わり、何が変わらなかったのか？ さらに、それらがこの先どうなるのか……？ おそらく読者の皆さんもそんな疑問をお持ちだと思いますが、その時に大事なことが一つあります。それは、いま眼の前で起きている変化を、過去から続く大

きな流れのなかで捉え直してみることで。たとえば、東日本大震災は日本人の価値観に大きな影響を与えたと言われます。しかし、震災前後の生活者の意識をよくみると、震災直後に大きく変化したものの、数年後に元の水準に戻ってしまったものも少なくありませんでした。それはコロナ禍でも同じことが言えるかもしれません。これからの社会や暮らしの行方を、いま起きていることだけに囚われず、平成からいまに続く大きな流れを振り返って考えてみよう……我々の狙いはそこにあります。

本書では「生活定点」の調査結果がたくさん登場します。一つ一つのデータは一見、何らかの「答え」を示しているようにもみえます。でも、考えてみればそれらはいわば「人の心」の積み上げです。〇%という数字の背景には、生活者一人一人の喜怒哀楽や関心ごとがない交ぜになって潜んでいるわけですから、分析に「正解」なんてありません。データを読み解く人の数だけ解釈があるはず。そう、つまりデータとは「答え」ではなく、向き合った人に投げかけられた「問い」なのだと思います。そんな認識のもと、本書は約30年間続く意識調査の結果を、多様な専門性を持った総勢19名にもおよび各界の賢者に、博報堂生活総合研究所とはまったく違う視点から解釈してもらうという、我々にとっても

初めての刺激的な試みとなりました。示唆に富む論考を寄せていただいた、中川淳一郎さんをはじめとする執筆者の皆様深く感謝いたします。そして、本書は星海社の片倉直弥さんのご尽力がなければ、成り立ちませんでした。この場を借りて厚く御礼を申し上げます。

2021年12月 博報堂生活総合研究所 所長 一石寺修三

※1 博報堂生活総合研究所：<https://seikatsusoken.jp/>

「生活者発想」を企業哲学とする博報堂グループのフラッグシップ機関として1981年に設立。人を消費者だけにとどまらない多面的で主体的な存在「生活者」として捉え、独自の視点と手法で研究を続けているシンクタンク。主な活動は、生活者の変化を長期にわたって追う時系列調査や、生活者と暮らしの未来洞察のほか、近年はデジタル空間上のビッグデータをエスノグラフィの視点で分析する「デジノグラフィ」も推進中。その成果は書籍はもちろん、発表イベントやwebサイトなどを通じて広く社会に発信している。

※2 生活定点：<https://seikatsusoken.jp/teiten/>

1992年から隔年で実施している博報堂生活総合研究所の基幹調査で、生活分野についての意識や行動、価値観などを幅広く聴取している。2012年からはwebサイトを通じて調査結果を一般公開中。登録不要・無償でExcel形式のデータファイルをダウンロードして利用することも可能。

調査地域：首都40km圏（東京都、埼玉県、千葉県、神奈川県、茨城県）

阪神30km圏（大阪府、京都府、兵庫県、奈良県）

調査対象：20～69歳の男女

調査人数：2、597人（2020年・有効回収数） ※2015年国勢調査に基づく人

口構成比（性年代5歳刻み）で割付

調査手法：訪問留置調査

調査時期：1992年から偶数年5月に実施（2020年のみ6～7月に実施）

目次

はじめに データは「答え」か？ 「問い」か？ 3

為末大

14

信じる理由を求める時代

大木亜希子

25

あのマウンティング男に今、愛と感謝のキスを

田村 淳

37

いつも常識をアップデートしていきたい

斎藤 哲也

47

リベラル・アーツよ、どこへ行く？

中川 淳一郎

56

平成の人間関係を一変させたインターネット

鳥羽 周作

68

インターネットとコロナ禍が変えた、伝達

「届けきる」をどう実現するか

高橋弘樹

77

恥ずかしさで逃げ出したくなる、「野菜の煮物」なき社会

藤田結子

91

「女性の手作り」愛情「はいつまで続く？」

棚橋弘至

100

プロレスに見る平成の考察

倉田真由美

110

いくつになっても恋愛したい

熊代亨

118

平成30年間の時代の変化とメンタルヘルス

常見陽平

127

私たちは自由な働き方ができたのか

豊田啓介

138

離散と流動

石山蓮華

146

電線目線で折れ線を見る

近藤那央

160

人の心をほぐし、繋げる“いきものらしいロボット”

西田宗千佳

170

黄金期から苦難の時代、

世界に翻弄された「ゲーム」というビジネス

家田莊子

179

災害とスマートフォン。平成社会が心をどう変えたか？

サヘル・ローズ

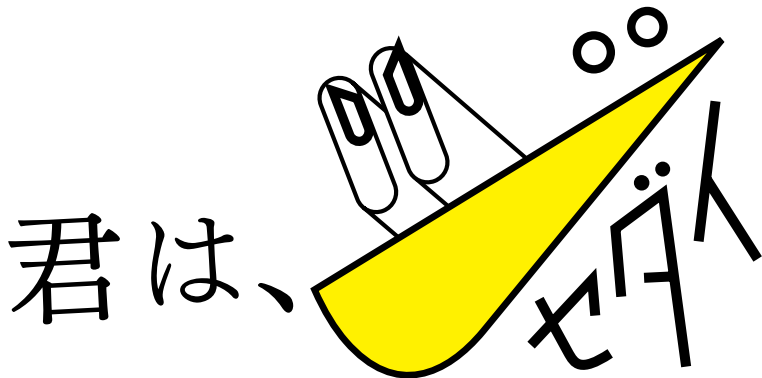
189

心に育む、豊かなアナタを

小川さやか

201

苦手な人びと、親しくない人びとに贈り物をしよう



何と闘うか？
<https://ji-sedai.jp>

「ジセダイ」は、20代以下の若者に向けた、
行動機会提案サイトです。読む→考える→行
動する。このサイクルを、困難な時代にあっ
ても前向きに自分の人生を切り開いていこう
とする次世代の人間に向けて提供し続けます。

メインコンテンツ

ジセダイイベント

著者に会える、同世代と話せるイベントを毎月
開催中！ 行動機会提案サイトの真骨頂です！

ジセダイ総研

若手専門家による、事実に基いた、論点の明確な読み物を。
「議論の始点」を供給するシンクタンク設立！

星海社新書試し読み

既刊・新刊を含む、
すべての星海社新書が試し読み可能！

マーカー部分をクリックして、「ジセダイ」をチェック!!!

行動せよ!!!